

車に積み込むのである。食糧不足で衰弱しているから困難を極めた。釜に亀裂が入ると、「溶接してもうまくくっつかない」と、溶接工の兵隊は困っていた。

そうこうしているうちに春が来た。シベリアの春は急にやって来る。春と夏と一緒にやって来る。秋も駆け足でやって来る。

六月に入ったある日、身体検査があった。女の軍医が尻の皮を引っ張って、皮のよく伸びるやつを選んで帰す方の組に入れる。割り当てにあと七人足りないと言う。そこでペレポーチク（通訳）が女医に進言してくれた。この人間は体格はよく見えるけれど、胸の方が悪い、と。おかげでダモイに編入してもらった。

昭和二十二年、帰還第二十二回目の永録丸に乗船、ナホトカ港を出発。六月十五日、小雨けむる懐かしの日本の山々を見たときの感激を思い起せば、今も涙があふれ出てくる。

東舞鶴港に上陸。頭から白い粉を浴びせられ、着ているものは全部脱衣して入浴させられた。さっぱりとシベリアのあかを流して汽車の人となった。十六歳の

春から旅に出て、やっと帰りついた生まれ故郷。二十五歳の春だった。シベリアで苦勞をとみにしたシラミは一匹もいなくなっていた。

シベリアの自分史

岩手県 日 沢 幸太郎

一、終戦からラーゲルへ

北支の北京周辺を防衛することを任務とする独立歩兵第七九大隊は、昭和二十年六月、満州に移駐するため北京を出発した。もちろん鉄道利用で有蓋貨車であった。機関銃だけは対空防衛のため無蓋貨車で、B 29の襲撃に備えた。私はその重機関銃の責任者として対空戦についた。山海関を通過し移駐地の興安省通遼県大林に到着するまでB 29の襲撃されることもなく無事に任地に着き、この任務を終えたのであるが、旅装を解いてから間もなく何の前ぶれもなく突如ソ連軍侵攻が開始された。八月九日のソ連軍侵攻を知ったのは、

二、三日後のことである。関東軍の主力は、南方に移動して南方において悪戦苦闘している最中である。

満州を警備する部隊は全くの留守部隊であり十分な火器も持っていない部隊であった。

その隙を狙ったソ連軍の侵攻としか思えない。我が部隊は奉天市を防備するために取り急ぎ奉天市西方台地に布陣した。当時の我が部隊は独立部隊であったので、山砲、重機銃等を十分装備していて戦闘能力として、精銳部隊であった。これに比べ満州の留守部隊は、火器らしい火器はほとんど南方方面に移送され、兵隊はいても火器を持たない兵隊という状態である。特に終戦直前に満州に在留していた予備役の現地邦人からの召集兵に至っては、小銃すら行きわたらない状況であった。

そんな装備の日本軍を相手に重戦車、装甲車を装備した重装備のソ連軍が、ソ満国境を突破して来たからたまったものでない。その侵攻速度は、戦車は少しも速度を緩めず、しかも戦闘らしい戦闘もせず、どんどん南下して来たのである。

現地邦人がどれほど周章狼狽したことか。昨日までは何不自由なく幸わせに生活していたのが、このソ連軍侵攻により、一瞬にして残酷の谷へ落とされたのだ。特に日本婦女子幼児の哀れさは筆舌で表現できるものでない。それと同時に私は日本軍か、日本人か、あの婦女子と同胞か、シベリア抑留中も私の脳裏を離れなかった。

終戦当日「重要伝達と部隊長からの訓示があるから部隊全員集合せよ」とのことで、陣地の高台に集合した。何か放送のようであったがよくわからない。部隊長から戦争は今日で終わりだと言われたけれども、このこともよくわからない。ましてや敗戦なんて夢にも思わない。必勝以外のことは、子供のときから教えられたこともない。戦争は終わった。敗戦とは考えつかなかった。だんだんと周囲の状況からして、終戦とわかってきた。そうこうしているうちに、決定的瞬間が訪ずれてきたのである「明日ソ連軍に兵器を納入する、各隊は兵器の員数を報告せよ」の伝達である。ああ、いよいよ来るものが来たか、これであの邦人を守って

やるからと心に決めたことができなくなった。よし私も男だと次のことを策定した。

北京から移動するとき数人の中国人が同行していた。この中国人はもともと武器を持って中国地内で匪賊のような働きをしている者たちで、日本軍に帰順した人たちである。終戦によっていつ暴れ出すか、あるいは逃げるかと思っていたが、その様子もない（元来中国人は義理固く人情深い民族）。そこで頭目と思われる親分を暗くなつてからコッソリ呼び出し、だれもないことを確かめてから「頼むことがある、いや今となつてはお願ひすることがある。男が男と見込んで頼むことがある。実は明日部隊の兵器をソ連軍に納入することに決まつた。そうなれば我々は丸腰となる全くの裸だ。しかしお前は中国人だ、今度は私の上になる。それはそれでいい。ただ私が一番心配しているのは邦人の安否だ。特に幼い子供婦女子だ。我々が武器を持たない兵隊と知れば、さらに暴行迫害を受けることだろう。特にあの大鼻子だ（ロシア人は鼻が大きいという中国人がけなして言う言葉）。今までお前たち

とともに生活して来た。あの日本人は何の罪もない。わかつてくれ、お前たちはここから出て行って、あの日本人を陰に陽に助けてほしい。それにいま一つ彼ら日本人を大連方向に南下させてくれないか頼む、頼むだけではおぼつかない。今ここにある兵器は、どうせ明日ソ連軍に納入する。この兵器の機関銃、小銃弾薬、駄馬の一部をやる。納入する員数は私が何とかする。今夜から明朝にかけて出て行つてくれ。私はお前たちを信じている。どうだ引き受けてくれるか」彼は私の肩をたたき「了解了解」と言つた。それからの手筈を打ち合わせし、あとは運を天に任せ、床についた。朝の起床時間より少し早めに起き、そこらを見たらもう彼らはいない。兵舎でなく野営であつたので、兵器を持つて行きやすいように手筈であつたから容易であつたと思う。今日は武器納入の日本軍創設以来の出来事、武器の数量点検どころか、あるものを持つて行くだけ。納入場所にはソ連軍はおらなかつたので、ばれることもなくこの一件は落着した。

その後彼ら中国人はどうなつたことか、日本人をど

うしてくれたことか、その後のことはわからない。それで私は彼らを信じている。

また武装解除の当日、部隊から逃亡した兵士があった。これは朝の点呼のときにおらないので判明したのであるが、だれ一人として探そうとしなかった。むしろ彼が南の方に逃げて無事に日本に帰れることを期待し折っている心理状態ではなかったろうか。

終戦を境にしてすべては三百六十度の転換に向かつて一歩一歩進んでいく。部隊の規律は保たれているが、未来に向かっては空しい集合体化であったことは否めない。

武装解除のため指定された場所に持っていった。驚いたことに兵器は鉄屑同様に積まれている。特に三八式歩兵銃には菊のご紋章は刻まれているが、これもただの鉄屑として野ざらしである。あれほど大事にし手入れてきたあの銃は、さびるに任かせた野ざらしである。大事に取り扱ったあの銃や火器と我々は一体何であつたらうか。

武器集積所に行く途中の出来事、武装解除されたは

ずの奉天飛行場から日本軍飛行機が飛び立ち、飛行場上空を旋回し始めた「変だなあ」と話し合つて上空を見上げていると、突如急降下した。いや降下と言うよりは地上に機体をたたきつけ炎上した。あの飛行士も今は苦しみことなく天国に旅立ったことだろう。

この八月は例年になく雨の多い月である。終戦の涙の雨か、それとも過去精算の雨か、否歴史転換の雨か、いずれよく降る雨だ。

ソ満国境の町黒河には、満鉄終着を目指してどこからともなく丸腰の日本兵は集まってくる。雨のための水たまりを避けて休んでいる。

いよいよ乗船だ。黒龍江を下って祖国日本に帰れるのはもう間近だ。東の空の方向が日本だ。千々の思いを胸に秘め乗船し、一時の疲れでコクリコクリ。とどうしたとか、河を下るところかソ連側に接岸下船させられた。これがソビエトかとあたりを見まわす間もなく、歩かせられ貨車に乗る。船でなく汽車で東方に行くのかと思いをめぐらしているうちに、全員の部隊兵は貨車に乗り移りを完了した。マンドリン銃を持っ

たソ連兵は我々の護衛か監視についている。

隣のホームには、ソ連兵を乗せた貨車が入っている。

恐らく満州から引き揚げてモスクワに帰るソ連兵だろう。驚いたことに男子と同じ服を着た女子のソ連兵が同乗している。マンドリンを持ったソ連兵はあつちに行ったりこつちに来たり、監視は厳しくなってきた。あとでわかったことだが、隣に乗っているソ連兵は、こちらの日本兵から時計、万年筆等を略奪するのを防ぐための行動であつた。だがこのソ連兵もあとで時計、万年筆を取り上げている。いかに彼らは物資に不足しながら戦い続けてきたかうなづける。

汽車はおもむろに走り出す。西に向かつて走り出す。ウラジオストクは東方のはず、恐らく西に大きくカーブをとつてウラジオに向かうだろう。この時点においても祖国日本に帰ることを信じていた。祖国の土を踏みたい。心も体もただそれだけである。

バイカル湖は大きい。海のようなである。これは日本海であつてほしかった。我々を乗せた列車は走つても走つてもバイカルは右側に見える。故郷の浜辺と同じ

ように波は岸边に押し寄せている。

何日間かの列車の中の生活もイルクーツクの次の駅で終わりを遂げて、ここにおろされた。

ここは駅だろうか、まことに殺風景である。駅のはかには何もない。あるものは満州から工場施設の一切合財略奪して山のように積まれている戦利品だけが目につく。

貨車からおろされた部隊は、部隊長以下隊列を組んで午後の影を長く残してトボトボと歩くというより全員が行き先もわからず、うなだれて歩く。ふと前方に新しい建物が荒野にボツンと建っている。どうやらあれが我々の住み家かもしれない。だんだん近づくにつれ、建物の周囲は有刺鉄線と板で囲まれている。しかも角々には高い監視塔が立っている。有刺鉄線には電流は流れているらしく、碍子がついている。

それでも我々は祖国日本に帰る希望と夢は絶ち切れない。いやそれどころか、ますます帰りたい望みは強くなる。あれは日本に帰る中継地点かもしれないと思うだけであつた。

ラーゲルの門扉は全開して羊の群れが畜舎に入るように吸い込まれてしまった。

色の黒い、やせ顔の部隊長の老顔は、全く無表情である。今何を胸の中に思っているか、食い入るように見つめる。数カ月前までは北京西方の太行山脈、河北省の広野を八路军を追撃していたときの部隊長の目はワシのように鋭い目であった。鼻ひげも寂しく見える。部下を一日も早く祖国に帰してやりたい表情はありありと見える。そのための表情だろうか。

いよいよこのラーゲルの三段ベクトを基地として、シラミ、南京虫、嚴寒、強制労働、栄養失調、死と望郷の戦いが始まる。

二、生活の記録の断片

(1) 生と死の接点往来

真昼の太陽は上空に輝けどもその温もりは、地上に達しない。こんなシベリアにいつまでいるのだろうか。いつ祖国の土を踏めるだろうか、あてもなくその日その日の重労働に、強制労働に服し、寒さと飢えに耐え忍んでいるのみ。ソ連政府は日本兵の労働エネルギー

を死直前の一滴も残さず吸い上げようとしている。

弔辞の言葉の中に幽明境を異にするという言葉があるが、シベリアに抑留されている日本人のすべてはこの生と死の境に四六時中、立たされている。この境界線から二、三步踏み込んだ同胞は、死の道をたどることになる。残酷の死としか表現できない。

強制重労働を終えラーゲルに向かう岐路、縦隊のだけれかがバツタリと倒れる。しかしみんな疲れているのでそれに気づかない。それもそのはず、だれもが歩くことで精いっぱいである。監視のため同行したソ連兵が行進停止を命ずる。あの倒れた日本兵をラーゲルまでつれて行けと命ずる。しかしそのときはもうすでに死んでいる。五、六人で何とかラーゲルまで運ぶ。彼はどれほど故郷をしのび今日まで生きて来たものか、親や親類の方々はこの惨状を知ったら……生きて耐え忍んでいる者も苦しい。戦争に負けてなぜこれほどまでに苦しまなければならぬのか。飢えの夜はふけて行く。いつの間に眠ったろうか。朝の起床時間になって、体のしびれをさすりながら起き上る。隣の兵士を

ゆり起こそうとして、ゆすつた方に体全体が動く。すでに死んで体は固くなったからだ。毛布ごと死んだ兵士をソ連兵に引き渡す。

シベリアの凍土は二メートル及至三メートルに達する。従つて埋葬された戦友たちは凍土の中に眠ることもできず、ひたすらに祖国からの迎えを待つておることと思う。

生き残つて祖国に生還した人たちも、生と死の接点に立ちながらよく帰れたものと思ふと思はれる。

(2) 戦利品で仇討

この地に到着したときの駅に満州からの戦利品が山となつて積まれてあつた。何しろ工場の施設を一切運んできたものらしい。

発電機からパイプ類、連結器材等である。この部品の整理整頓のため我が班はこの現場で働くこととなつた。真冬の零下三十度以上での労働である。よくもこれだけ運んだものだ。びっくりするやらあきれるやら、運んで整理するものは鉄製品であつた。鋳物は厳寒であれば落とすと割れることがわかつてきた。また鉄道

レールも少し傷を入れハンマーで強くたたけば割れることもわかつた。監視人の見ていないときを見計らつて相当数壊していった。もともとこの戦利品は日本のものである。この行動により若干の気分晴らしもできたし、とるにたらない仇討を果たしたような気がした。しかしこの仕事も三日ほどで他の班と交代させられたが、ばれたのではないかと数か月心配の日が続いた。でも仇討事件は何ごともなく終了しホッとした。

(3) ロシヤ人雑感

(イ) 勝者と敗者

満州から引き揚げて来たソ連将校、私に向かつて「日本軍は満州にあれだけの物資を残しておりながらなぜ戦争に敗れたのか我々には納得いかない」という質問であつた。この将校は日本人から奪つた腕時計を両腕に二、三箇所つけている。万年筆もたくさん持っているようだ。私はそれに答えず逆に「ソ連は物資は相当不足しているようだ。なぜドイツ、日本に勝つたか、原因は何だったか」と言うと、彼はすかさず「ソ連には多数の民族がいる、この民族が一致団結して戦つたか

らだ」と言う。私はなるほど思った。というのは、今シベリアにウクライナ人を中心として少しでも共産党に異論を唱えたり、反感の意を表したりする者は容赦なくこのシベリアに送られ、労働刑に服している。その数は何百万人か、権力による民族の団結である。

(ロ) ロシア人と共産主義

我々はロシア人といえば共産党、共産党というとロシア人と、相関関係のように思われる。労働のためロシア人とともに働くことがある。彼は実に人なつくく、やさしい面を多く持っている。ところが共産主義のこゝとや思想的なことを話し出すと、今までにぎやかであった座は急に黙りこくなり、ついには一人減り、二人減り、ロシア人はその場にいなくなってしまう。これは後でわかったことだが、工場や事業場に共産党員が必ずいることになっていて、主義思想を話すとそのことを党員に密告するという仕組みだということを聞いて、私もそのとき冷汗をかいた。

私のシベリア抑留記

三重県 北川 長吉

昭和二十年八月八日未明、ソ連軍が満ソ国境を越えて侵攻を開始し、そして八月十五日、大命降下による終戦となった。八月二十日、武装解除となり、四平駐屯部隊の将兵は次から次へと、どこへやら連れ去られ、私は残務整理に残留させられた。野戦貨物廠時代の少数の同僚と、北支より転進部隊及び四平陸軍病院の人たちと混成隊を編成し、十一月中旬ごろ、日本へ帰してやるとソ軍監視兵にだまされて、有蓋貨車（扉入り口のところは一段式、その前後は二段式）に詰め込まれて出発。

内地送還は半信半疑でしたが、ハルビンにて指令待ちのため二日間停車した後、西に向かっていることが確認され、内地送還の夢は打ち消された。そして、満州里を越え、ソ領へ入り、チタも過ぎ、バイカル湖を